

日本の地理教科書におけるフィリピン

田宮兵衛

0. 掲載の趣旨

国際教育情報センターが2003年1月19・20日開催した、「2003年日比歴史・地理教育会議」において行った報告を、同会議報告書から同センターの許可を得て、「1. はじめに」以下に転載する。

なお、国際教育情報センター（理事長：賀陽美智子氏）は国際間の親善と理解に寄与することを目的として、昭和33（1958）年設立された外務省情報文化局（現大臣官房）海外広報課所轄の公益法人であり、次のような事業を行っている。諸外国の教育資料を収集、調査・研究し、日本に関する記述の誤りに対して訂正意見を送付する、また、日本に関する教育資料の作成・出版・配付、諸外国教育関係者の日本研修旅行の招聘、教育関係者の日本研修への協力、など。

前記会議はフィリピン教育家（同センターの2002年度の開発途上国教育家招聘の一環として2003年1月18日から25日の間来日したフィリピン文部省首都圏中等教育局長他3名）と日本側報告者3名他が参加して行われた。なお、報告書には質疑応答も記録されているが省略する。

1. はじめに

田宮と申します。地理の教科書についてお話しすることになっていますが、まず自己紹介をいたします。私は地理を専攻しておりますが、地理には御承知のように自然地理学（Physical Geography）と人文地理学（Human Geography and Cultural Geography）があります。私の専門は自然地理学で、特に大気関係、気象とか気候という分野なので、今日の役目には必ずしも適任ではないかも知れません。

しかしながら教育に関しましては多少の関りがあります。1997年から4年ばかり、お茶の水女子

大学附属中学校の校長をしておりました。また、お茶の水女子大学の附属には幼稚園から高等学校まであり、このところはそれらを調整・統括する役をしております。日本の教育が変革期を迎えている問題につきましては先程もお話がありました。が、今、国立大学が全面的な改革を求められている中で国立大学の附属学校も改革しなくてはならないということになり、その仕事もしております。

このような状況の中で、「地理教育はどうあるべきか」という問題につきましては、日本の教科書におけるフィリピンの取り上げ方を見ながら具体的に考えることは貴重な機会になりました。まず、「地理教育はどうあるべきか」という問題につきましてその背景を含め私が考えておりますことを説明いたします。

2. 地理の教科書・地理教育の背景

教科書は学校で使用する出版物ですが、教科書を使う学校とは何かを考えますと、親または社会の付託を受けて社会的に共通する教育をまとめて行う所でありましょう。親が子供に受けさせたい教育のうち共通的部分、例えば言語であるとか、数学であるという場合は、比較的個人による違いが少なくイメージがそう拡散しないですむと思います。ところが社会科のような教科、理科もそうかも知れませんが、事実認識に関わる教科におきましては価値判断、自然観、世界観、人間観が問われるので、社会的に共通すべき教育の内容は中々単純には決められない問題です。特に、価値観の多様化が進行している社会ではそうなります。

現在、日本では価値観の多様化が急激に進行していると考えておりますが、日本は第二次大戦後、ついこの間まで経済の高度成長が国民の比較的共通な目的になり得た時代が続いておりました。戦前には共通の目的として、富国強兵ということで強い軍事国家となることがありました。それは、

先程もお話がありましたように、アジア諸国への侵略から太平洋戦争、その敗北により否定されましたが、日本国民が共通目的を持つことは、戦前・戦後を通じて続いていたこととなります。ただし、経済の高度成長も10年程前に限界に達したと考えるのが、今の日本では、恐らくかなり共通の認識となっていると思います。

午前のお話にもありましたように、現在は globalization といわれる時代になっております。そこでは国民国家も今までのような形では存続し得ないであろうことも共通の認識だと思えます。国民国家を国単位で完結したものと成り立させ得るような社会的条件、経済的条件がなくなってきた現在、さて各国はどうするか、あるいは各地域はどうするかという問題に直面していると考えております。そういう場面では、非常に保守的に昔の状態を復活・維持しよう、古い形の国民国家の体制に戻そうという考え方もあり得ます。その一つが先程のお話にあった新自由主義者という人々がやっていることであろうと考えております。それに対して globalization という流れに素直に乗っていかうと考える人々も当然あります。しかしながらその globalization の流れに乗る場合に先程も御指摘がありましたようにアメリカという一つの国がとなえている globalization にそのまま乗っていかうと考える場合もあるし、本当に世界は自由に国境はなくなって行き来できるようになって、世界の文化は一つになるという考えを取ることも理論的には可能です。日本におきましては、不思議なことに、日本の政府の考え方はアメリカのいう globalization に従いながら、先程お話があった靖国神社に総理大臣が行きたがるというように、昔の保守的な社会を復活・維持しようという非常に矛盾せざるを得ないことを目指しているのが現状です。

Globalization というかその前提である交通・通信が進歩したことは客観的な事実であり、それに対応して社会が変わって行かなければならないのは必然的に要求されることです。そういう状況の中で地理という教科で何を教えて行けば良いかというのは相当難しい話になって、日本の社会科の教科書、地理の教科書で必ずしもうまく行っていないのではないかと感じております。それをこれから詳しく見て行きます。

3. 学習指導要領—地理の場合

外国の方でも教育関係の方は御存じかと思いますが、日本の教科書は学習指導要領に基づいて作らなければいけないということになっています。編集した上で最終的に文部科学省のチェックを受け、その指示にしたがって修正するのですが、これを検定と称しております。現在使われている教科書が準拠しなければいけない学習指導要領は、中学校の場合は1998年に公示されて2002年度から使われていますし、高等学校は1999年に示されて2003年度使用の教科書からそれに従った内容になります。前回の学習指導要領が決まったのは1989年頃で、大体数年に一回改定されています。

今回取り上げる地理の教科書は、中学・高校の教科書11種を参考にしました。文末にリストをつけてあります。

3.1 高等学校の場合は、「地理・歴史」という教科の中に地理A、地理Bという科目があります。AとBが何かというのは分かりにくい所がありますが、地理Aの授業時間は週あたり2時間で地理Bの半分であることが一番大きな違いです。

学習指導要領に示された地理Aの内容は以下の通りとなっております。

- (1) 現代社会の特色と地理的技能
 - ア 球面上の世界と地域構成
 - イ 結びつく現代世界
 - ウ 多様さを増す人間行動と現代社会
 - エ 身近な地域の国際化の進展
- (2) 地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題
 - ア 世界の生活・文化の地理的考察
 - (ア) 諸地域の生活・文化と環境
 - (イ) 近隣諸国の生活・文化と日本
 - イ 地球的課題の地理的考察
 - (ア) 諸地域から見た地球的課題
 - (イ) 近隣諸国や日本から見た地球的課題

また、地理Bの内容は以下の通りです。

- (1) 現代社会の系統地理的考察
 - ア 自然環境
 - イ 資源、産業
 - ウ 都市・村落、生活文化

(2) 現代社会の地誌的考察

- ア 市町村規模の地域
- イ 国家規模の地域
- ウ 州・大陸規模の地域

(3) 現代社会の諸課題の地理的考察

- ア 地図化してとらえる現代社会の諸課題
- イ 地域区分してとらえる現代社会の諸課題
- ウ 国家間の結び付きの現状と課題
- エ 近隣諸国研究
- オ 環境、エネルギー問題の地域性
- カ 人口、食料問題の地域性
- キ 居住、都市問題の地域性
- ク 民族、領土問題の地域性

これらを御覧になって見て分かるように地理Aと地理Bで、何が違うのかは判然としません。これを一つずつ見ていく必要が現実にはあるのですが、今回はそこまでやってないので、文部科学省が要求している高等学校の教科書は地理A・Bそれぞれ上のような情報を含んでいなければいけない、しかしながら両者の違いは明確ではないことをデータとして御認識下さい。地理の場合は社会的、経済的な事実の他に、具体的には教科書を見て頂く方が早いのですが、それを表現する地図をどう作るか、どう読むか、そういう教育も地理という教科で行います。

特定の国について取り上げることは、地理Aにおいては(2)「地域性を踏まえてとらえる現代世界の課題」のA「世界の生活・文化の地理的考察」(ア)「諸地域の生活、文化と環境」、(イ)「近隣諸国の生活、文化と日本」あるいはイ「地球的課題の地理的考察」(ア)「諸地域から見た地球的課題」、他方、地理Bでは、(2)「現代社会の地誌的考察」のイ「国家規模の地域」などに対応して行われる可能性があります。

3.2 中学校の場合は、社会科という教科があったその中に地理的分野として地理は含まれています。他に歴史的分野と公民的分野があります。授業学年・授業時間の分野別の指定は特にはなく、1年と2年の時には週3時間(年間105時間)の社会科の授業があり、3学年の時には平均週2.4時間(年間85時間)の社会科の授業があります。1年生の時に地理の授業があるのか、2年生の時にあるのかは、学校により違うのですが、1年

の時に地理の授業がある学校が多いと聞いております。

地理的分野の具体的内容は以下の通りです。

(1) 世界と日本の地域構成

- ア 世界の地域構成
 - (ア) 地球上の位置関係と水陸の分布
 - (イ) 国々の構成と地域区分
- イ 日本の地域構成
 - (ア) 日本の位置と領域
 - (イ) 都道府県の構成と地域区分

(2) 地域の規模に応じた調査

- ア 身近な地域
- イ 都道府県
- ウ 世界の国々

(3) 世界と比べて見た日本

- ア 様々な面からとらえた日本
 - (ア) 自然環境から見た日本の地域的特色
 - (イ) 人口から見た日本の地域的特色
 - (ウ) 資源や産業から見た日本の地域的特色
 - (エ) 生活・文化から見た日本の地域的特色
 - (オ) 地域間の結び付きから見た日本の地域的特色
- イ 様々な特色を関連付けて見た日本

中学校の場合も比較的最初の方に自然地理的な知識がまとまっていて後に行く地域だとか人文・社会的な現象に移って行きます。そして、中学校の最後は(3)「世界と比べて見た日本」の、イ「様々な特色を関連付けて見た日本」で終わっています。日本を中心にまとめる形になっていますが、同時にそれは、日本中心になりがちであるということになります。高校と中学を比較して一番目立つのは、高校の教科書では世界に広がる視野が一応打ち出されていることかもしれません。

4. 総合的な学習の時間

それからもう一つ、今適用されている学習指導要領について指摘しておかなければいけないのは、総合的な学習の時間です。これは文部科学省が今までは学習指導要領に書いてあることしか教えてはいけないと言っていたのが、その枠を外して時間数だけを示して何をやっても良いという時間です。従って総合的な学習の時間向けには教科書というもの無いし何を教えても良いのですが、文部

科学省は国際理解・情報・環境・福祉・健康などが対象となり得るということを一応示しています。それは単なる例であって各学校、教師が自分でテーマを選んで授業をすれば良いことであり、従って国際理解ということ地理的内容とすることも可能なはずで。

ところが日本の学校の教師を養成する教育というのが必ずしも自分で考えて教材を作ることが得意な可能な教師を養成して来なかったという問題がありまして、総合的な学習の時間を有効に活用するには相当な困難が予想され、批判的な意見もかなりあります。前後しますが、先程中学校の社会科の時間が3年生で85時間という変な時間が出て来ましたが、これは総合的な学習の時間を捻出する為に文部科学省がつつまを合わせた結果であると記憶しています。総合的な学習の時間は中学では2002年の4月から始まり、高校では2003年の4月から始まるので将来がどうなっていくのかは注目しなければいけないし、まだ結果は出ていないという段階です。

最初に述べましたような社会的状況の中で、学習指導要領という形で教科書の内容が規定されていることを見たので、これから具体的な教科書について触れることにします。

5. 日本の地理の教科書

学習指導要領においては、高校の場合は地理A、地理B、中学校の場合は地理的分野の目標が最初に掲げられています。高校地理Aの目標は「現代社会の地理的な諸課題を地域性を踏まえて考察し、現代社会の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う。」となっています。地理Bでは「現代社会の地理的事象を系統地理的、地誌的に考察し、(以下地理Aと同文)」と、前半が少し異なるだけです。いずれにしても、非常に抽象的で、どういう意味なのか具体的には掴みにくい目標しか書いてありません。その中には現代社会の地理的認識を養うことだとか、地理的な見方、考え方を培うという表現がありますが、これが何であるかというのは、何でも入ってしまうという意味で簡単ではないということです。目標全体としてそんな長い文章ではないのですが、結論としては日本人としての自覚と実質を養うと

いう形で終わっています。これを私は、国の基準ではまだ国民国家的な考え方が脱却できていないと解釈しています。ところが実際に使われている教科書は、少なくとも先程申しました通信、交通が短縮されたということに基づく globalization という現象を意識せざるを得ないのです。

地理の教科書を振り返って見ますと古い時代、戦前の富国強兵の時代には、国別に知識を羅列している状態がありました。ある国・ある地域を取り上げて自然条件はどうで、人口は、経済はどうであるかということの羅列では読んでいても面白くないというのが現実でした。その反省として、第二次世界大戦後は国や地域別の記述を減らして自然地理なら自然地理、人文地理なら人文地理、自然地理なら地形と気候、そして人文地理は経済地理、集落地理あるいは文化地理と分けて教科書を作る時代が続いていました。そういう編集方法を系統地理学という言い方をしていたのですが、それはそれで世界の各地域の特色が明瞭に認識できないという欠点があります。学習指導要領は1989年の改定でもう一度国や地域というものを全面に打ち出すような形の改定を考え、それが地理Aとなっています。地理の教え方という観点からは、そういう区別ができるのですが、実際には授業時間を週4時間を2時間に減らすという要請の方が大きかったと考えられますし、受験教育で地理の占める比重が下がって来たことの反映もあります。

地理Bでは、地誌的や系統地理的という言葉が学習指導要領にも残っています。今回見た教科書、地理Aの教科書は4種類、地理Bの教科書は7種類につきましては、しかしながら、学習指導要領の内容を殆ど反映していない、どう反映されているか分からないという現実に気が付きました。学習指導要領がどうであれ世界の globalization という現実にあっては、昔のように国別に地理的知識を得てもしょうがないという認識は共通な状態になっている、あるいはそういう人達が教科書を作っている、文部科学省もそれを認めているという状態であると考えます。

このような考え方で教科書を書いていくと、世界をEUやASEANというグループに分けてそこで概括的に世界のある地域のことを論ずることが行われます。その場合ASEANの中の一つの国を取り上げるということもありますが、フィ

リピンを一つの国として取り上げる場合は、先程も指摘がございましたバナナの関係で出てくる以外は出て来ないというのが現実です。

国の例として上がって来るのはインドが一番多いようです。地理Aでは4冊に対して4冊ともインドが出て来るし、地理Bでは7冊中6冊にインドが例として上がって来ています。以上は高校の話ですが、中学校では具体的に国を挙げることは余りしないようです。ASEANは3冊中の2冊で取り上げられ、フィリピンはASEANの加盟国として出てきます。その他、国として出て来るのはインドネシアを一つの例として上げているのが高校の教科書の一つありました。中学校でマレーシアを例に上げている教科書が1冊ありました。

5.1 フィリピンが出て来るのは基本的に少ないのですが、2ヶ所ばかり目立つ取り上げられ方があります。一つは先程も指摘があったバナナですがこれについては後で触れます。もう一つは自然地理でプレートテクトニクスに関係して出てきます。それは、「フィリピン・プレート」ないし「フィリピン海プレート」という地学用語です。プレートテクトニクスというのは御存知と思いますが、日本列島に接しているプレートの一つに「フィリピン海プレート」あるいは「フィリピン・プレート」というのがあります。プレートテクトニクスという理論の説明は、高校の場合全ての教科書に出て来るのですが、その中で「フィリピン海またはフィリピン・プレート」という名前が図の中に出て来るのは地理Aの場合4冊中1冊、地理Bの場合で7冊中4冊です。中学校でも3冊中1冊に出ていました。ただし、本文の中に出てくるのではなく、日本の回りにあるプレートの配置図の中で、日本のすぐ南側にあるプレートの名前として出て来ます。しかしその図では、フィリピン諸島が乗っている南の部分までは描いてなくて、プレートの北の端の日本列島に接する部分に僅かに名前が書き込まれているだけです。数年前にフィリピンのヒナツボ火山で大きな噴火があったので、火山災害の例で出ているかと思ったのですが、それを取り上げている教科書はないようです。

5.2 経済的、社会的、文化的問題としてフィリピンが取り上げられる例として、先程いいました

ようにASEANは全ての教科書で取り上げており、そのメンバーとしてのフィリピンは当然出てきます。それ以外の例を、ある1冊の教科書について述べます。その教科書は清水書院という出版社の「新地理A」という教科書ですが、索引が丁寧にできているので、フィリピンがどのように取り上げられているのか全部分かります。ASEANの他に5ヶ所フィリピンに言及があります。一番目が中国系住民が多い国の一つとしてのフィリピン、二番目にイスラム教の分布の東の端がフィリピン南部であるということ、三番目の例がフィリピンから日本へ労働者が多数来ているということ、四番目の例が東南アジアというのは複雑な地域であるという例として、16世紀にはフィリピンにキリスト教が布教されたということが書いてあります。五番目が日本のODAがフィリピンで植林事業を行っているという事実が出てきます。

他の教科書の索引は不十分なので、清水書院の教科書と同じことは時間がなくてできなかったのですが、細かく見ていくと大きな問題の一部でフィリピンに触れていることはあると思われます。しかしながら、清水書院のASEAN以外の5つの例で分かりますようにそれらをまとめてフィリピンはどういう地域であるかということの思い浮かべるのは非常に困難です。

5.3 最後にフィリピンについて集中的に取り上げられている例として、先程も言及のあったフィリピンのバナナ農園の話について述べます。地理Bの教科書の7冊中4冊の教科書がフィリピンのバナナ農園を取り上げています。出版社としては3社ですが執筆者は全部違います。それらを、次に示します。なお、“/”により章・節などの区分を示しました。また“/”の数が少ないほど大きく取り上げられていることとなります。

- ① 実教出版：地理B；生活と産業／食料生産と農業地域／フィリッピンの熱帯農業－バナナを中心－（pp.94-95）
- ② 帝国書院：高等世界地理B；生活と産業／産業の国際化と地域分化／ASEAN諸国の産業の国際化／フィリッピンのバナナ農園（pp.168-169）
- ③ 帝国書院：新詳地理B；生活と産業／農業活動と地域の変貌／国際化・情報化の進んだ農業／フィリッピンのバナナプランテーション

(pp.171-173)

④ 二宮書店：詳説地理B／生活と産業／産業の立地と地域の変容／東南アジアにおける産業地域の発展／日本向けバナナ栽培 (p.172)

最も大きく取り上げているのは①実教出版社で、現代と地域、生活と環境、生活と産業、世界と日本という4編構成の第Ⅲ編「生活と産業」の第2章「食糧生産と農業地域」の中の第6節「フィリピンの熱帯農業－バナナを中心に－」という形で出てきます。他の例を見ますと④二宮書店では、現代世界と地域、人間と環境、生活と産業、世界と日本という4編構成の第Ⅲ編「生活と産業」の第1章「産業の立地と地域の変容」の第4節「東南アジアにおける産業地域の発展」があり、その中に「日本向けバナナの栽培」という項目が立てられております。いずれの記述におきましても、熱帯の農作物、アグリビジネス、日本が輸入する農産物、ミンダナオ島、プランテーション、農業労働者などが共通するキーワードになっておりますが、世界には色々な農業があるという1つの例という書き方になっています。しかし、フィリピン人がバナナを自国の産業としてどのくらい重要視しているのか、日本で高校の教科書の7冊の内4冊が取り上げる必要がある問題なのかどうかは、必ずしも明瞭ではありません。この背景には、鶴見良行という人が1982年に「バナナと日本人－フィリピン農園と食卓のあいだ」という本を出版され、この種の本としては良く売れたという事実があります。当時の読者が今の教科書の執筆者に年齢的になっているのではないかとということが考えられます。

また、フィリピンで実際にバナナを作っている農民の方がどのような立場にあるのかは中々読み取れない表面的な記述にとどまっているという問題があります。これは、日本の教科書が検定を受けなければならないということで、統計で示しにくい農民の大変さを省いて数字を示し得る事象、または写真が撮れる事象を優先的に採用するという結果かも知れないという心配があります。上の4例は「生活と産業」というくくりでは一致していますが、そこから先は視角が異なっており、各教科書はフィリピンのバナナ産業好きのように置いていることがわかります。さらに、先に示した学習指導要領との対応は良く分かりません。

6. おわりに

地理で何を教えるかということ、世界の中の日本という視点は当然ありますが、アジアの中の日本ということで教科書を見ると非常に弱いという印象があります。アジアの中の日本という場合に、当然第二次世界大戦やもっと古い時代15～16世紀からの交流という歴史的問題はあるはずですが。地理の教科書では、歴史という教科があるから、歴史的な事実を取り上げにくいとは思いますが、まったくそういうことに触れなくて良いのかというと、そうはいかないだろうというのが個人的な意見です。

外国との相互理解と言った場合に、その地域に関する詳しい歴史を含めた情報がなければ相互理解は成り立たないはずなのですが、少なくとも地理の教科書を見ていて、特に今回フィリピンの例を見ていて、そういう要求を満たすレベルには達していないというのが私の現在の感想です。今回この機会を与えられてフィリピンについて詳しく見たのですが、地理教育は如何にすれば良いか、地理の教科書は如何にあるべきかということとは、もっと深刻に考えなければいけないかという問題を改めて認識することができたということで、私にとって貴重な経験になりました。

最後に、もしかしてこのことは地理だけではなく、日本の教育全般の問題を反映している感じを持っておりますことを申し上げまして私の話を終わりたいと思います。

参考文献

鶴見良行 (1982) : 「バナナと日本人－フィリピン農園と食卓のあいだ－」. 岩波書店, 230p.

参考にした教科書

[] 内は監修者または奥付記名者または筆頭著作者および前記以外の著作者数

地理Aの教科書 (4冊) ;

教育出版：地理A 改訂版 152p. [石井素介・奥田義雄ほか9名]

清水書院：地球社会に暮らす人びとの生活と課題 新地理A 改訂版 151p. [山本 茂・山下脩二ほか7名]

- 帝国書院：高等学校 新地理A 初訂版 144p. [佐藤 久・谷岡武雄ほか7名]
- 二宮書店：現代社会のすがた 地理A 152p. [山本正三ほか10名]
- 地理Bの教科書(7冊)；
- 三省堂：詳解地理B 195p. [西川大二郎ほか9名]
- 実教出版：地理B 207p. [福島達夫・長岡 顕ほか10名]
- 清水書院：地球的視野で考える今日の世界 現代地理B 改訂版 207p. [山本 茂・山下脩二・山川充夫ほか11名]
- 帝国書院：高等世界地理B 初訂版 202p. [坂本英夫ほか8名]
- 帝国書院：新詳地理B 初訂版 295p. [佐藤 久・谷岡武雄ほか8名]
- 東京書籍：地理B 315p. [矢田俊文ほか9名]
- 二宮書店：詳説地理B 最新版 303p. [山本正三・正井泰夫ほか13名]
- 中学校の教科書(3冊)；
- 帝国書院：社会科 中学生の地理 世界の中の日本 最新版 224p. [中村和郎・高橋伸夫ほか6名]
- 教育出版：中学社会 地理 地域にまなぶ 244p. [奥田義雄・阿部 齋・笹山晴生ほか39名]
- 東京書籍：新しい社会 地理 201p. [田邊 裕ほか37名]

たみや ひょうえ
お茶の水女子大学